

学生の死生観の状況と看護・介護学生間の比較

A Study of Nursing and Care Students' Attitudes toward Life and Death

山下 恵子 赤 沢 昌 子
Keiko YAMASHITA Masako AKAZAWA

要旨

本研究の目的は、看護学生と介護学生の死生観の状況と学生間の比較、看護学生は教育内容によって死生観が影響されるのかを明らかにし、今後のいのちの教育に対する示唆を得ることであった。研究協力者は、看護学科1年生と介護福祉学科1年生の129名であり、その協力者に対し質問紙調査を行った。測定用具は平井らが開発した死生観尺度7因子27項目の臨老式尺度を用いた。回答が得られた学生129名をSPSS 17.0for Windowsを用いて分析を行った。

その結果、次のようにまとめられた。

1. 死生観には、年齢、性別が影響していた。
2. 看護学生も介護学生も『死後の世界観』の得点が高かった。
3. 身近な人の死は介護学生の死生観に影響していた。
4. 看護学生の講義後の死生観では、死への恐れが低下しており、解放としての死や死からの回避が高くなっていた。
5. いのちの教育や終末期教育において、詩や体験談や老いや死に関する絵本等を用いた教育は死生観に影響を与えおり、授業に当たっては対象の特性を把握して行う必要性が示唆された。

【キーワード】 死生観、看護学生、介護学生、いのちの教育

I. はじめに

終末期の医療のあり方がさまざまな分野で討論される中で、将来医療・福祉を担う学生に死をどう学ばせるかが各教育機関で検討されている。病院で死を迎える人が多数いる現在、死は避けては通ることはできない。また、福祉施設においても、特別養護老人ホームが終の棲家としてターミナルケアまで担うようになってきているため、看護師の配置が絶対的に少ない福祉現場では介護福祉士が入所者の死を看取することも少なくない。このような中であって学生に死を学ばせるとき、学生が死をどのように感じ、考えているかを知ることが不可欠である。短期大学に入学してくる学生は高校までの教育の中で、「死」を考え、学ぶ機会をほとんど持たずに看護学や介護福祉学を学び始める。学校教育を受けていく中で死について考えはじめ、講義や演習、実習で事例や実際の場面で死に直面しながら死生観を形成していくと考えられる。この死生観がターミナル期にある人の看護学実習や高齢者の介護実習において、学生の実習態度や患者とのかかわりに大きく影響していることが考えられる。

本研究の対象短大は、看護学科、介護福祉学科、幼児保育学科、福祉専攻の専攻科の4学科がある。4学科とも人を相手にする専門職者として将来の医療、

福祉を担っていくことになる。看護は命を支え、健康の維持、増進および回復に援助の中心をおきながら生活を支える。また福祉は今までのその人のありかたや現在のありようから、より良い生活を支援援助していくことである。ひとのいのち・可能性・権利を保障し、その人らしい生活を支える専門職者を育てることをめざした短大である。援助を必要としている人、特にターミナル期にある人や高齢者を援助していくとき、「死」を現実のものとして受け止めながら、いまある「生」をともに考えていける学生を育てていくことの必要性を感じている。

看護学生に関する死生観の研究では、石田ら¹⁾(2007)が、死生観には宗教、性格型、読書、映画、年齢、学年が影響することを明らかにし、講義や技術の教授のほかに死に関する書籍や映画を取り入れて生と死を検討できる教育の必要性を示している。また、長谷川ら²⁾は、臨地実習や講義を通して自分の身近な人との死別体験を結びつけて、自分の生と死を見つめ考え死生観が深められるとしている。風岡³⁾ら(2007)は、看護学生は専門科目の講義を受けることによって死を前にした患者に対する援助へのモチベーションが換気され、3年生の実習中に患者との関わりを通して感情をコントロールするようになり、患者の死生観を客観視するように変化することを明ら

かにしている。介護学生の死生観に関する研究で、渡辺ら⁴⁾⁵⁾は介護学生の死生観に影響を及ぼす要因について看取り体験のある方が死の不安が高く、死後の世界を信じていることを明らかにしており、学年比較では看取り体験のある1年生と2年生では、死に対する不安が1年生の方が大きいとしている。花野ら⁶⁾は、看護学生と介護学生の死に対するイメージは大差がないとしている。教育内容の研究では、門林⁷⁾⁸⁾⁹⁾(2009)は、看護学教育や薬学教育にがん患者の闘病記を取り入れた授業をすることにより患者の思いや病いの向き合い方だけでなく、「新たな自分」の立ち上がりに触れることができるとし、自分を切り拓く現代の患者像や「病を語る意味」について考えられるとしている。また、福山¹⁰⁾は看護学生の抱く「生」と「死」のイメージでは、読書前後で「暗い」「悲しい」などネガティブなものの多くがポジテ

ィブなものに変化することや「生と死の教育」は、「死」への極端な恐怖や不安を軽減し、「生」を肯定することをめざすことができるとしている。

以上のように、死生観に影響する因子や介護学生の看取りの体験と死生観、看護学生と介護学生との比較の研究、教育内容の研究は行われているが、講義の前後での死生観の変化についての研究は少ない。そこで、本研究の目的を、学生の死生観の状況と看護・介護学生間の比較、看護学生は教育内容によって死生観が影響されるのかを明らかにし、今後のいのちの教育に対する示唆を得ることとした。

II. 研究方法

1. 調査対象

看護学科1年生 70名

介護福祉学科1年生 58名

2. 調査方法

1) 質問紙調査法

①質問紙内容

質問紙のおもな内容は、①対象の特性(年齢、性別)②影響要因として身近な人の死③死生観であった。

死生観の測定用具(表1)は、平井¹¹⁾が作成した7因子(①死後の世界感②死への恐怖・不安③解放としての死④死からの回避⑤人生における目的意識⑥死への関心⑦寿命観)であり、27項目で構成されている、臨老式尺度。また、回答の安定性を見るため、同じ質問を質問紙の前半と後半に入れた。この尺度に関しては妥当性と信頼性の検証が行われており、再検査法による信頼性・基準関連妥当性・構成概念妥当性が確認されている。

看護学科の学生には、生命倫理の初回と最終回講義時で同じ質問紙を用いて、講義前後の比較を行った。介護福祉学科では、講義が同一教員ではないため、講義前後の比較はしなかった。

②講義内容

生命倫理の講義内容は、小児がん患者の書いた詩、障害を持つ子どもと親の書いた詩、老いをテーマにした絵本、いのちを扱った新聞記事、がん患者の体験者の話(当事者)、子どもを亡くした親の話、新聞記者(第三者)の話を5コマ使って講義する。毎回講義の後に自分が感じたことなど自由に記載してもらった。

表1 死生観尺度

第1因子:死後の世界観

死後の世界はあると思う

世の中には「霊」や「あたり」があると思う

死んでも魂は残ると思う

人は死後、また生まれ変わると思う

第2因子:死への恐怖・不安

死ぬことが怖い

自分が死ぬことを考えると、不安になる

死は恐ろしいものだと思う

私は死を非常に恐れている

第3因子:解放としての死

私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている

私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている

死は痛みと苦しみからの解放である

第4因子:死からの回避

私は死について考えることを避けている

どんなことをしても死を考えることを避けたい

私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれははねのけようとする

第5因子:人生における目的意識

私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している

私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある

私は人生について考えると、今ここに生きてい理由がはっきりとしている

第6因子:死への関心

「死とはなんだろう」とよく考える

自分の死について考えることが良くある

身近な人の死をよく考える

第7因子:寿命観

人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う

寿命は最初から決まっていると思う

人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められている

2) データ収集方法

担当講義時に質問紙を配布、無記名にて実施し、記入後その場で自由回収し退出した。

3. 調査期間

看護学科1年生:生命倫理の初回講義時、2009年4月と最終回の7月に実施した。
介護福祉学科1年生:介護技術の初回講義時、2009年4月に実施した。

4. 分析方法

①看護学生と介護学生の死生観の比較②看護学生の講義前後の死生観の比較を上位項目は、SPSS 17.0 for Windowsを用いて、上位項目ではt検定を行い、下位項目ではMann-Whitney's Utestを行った。単純集計についてはExcelを用いた。統計的有意水準はp値が0.05以下とした。

③看護学生の講義前後の対象の概要と死生観の比較④介護学生の対象概要と死生観の比較には、 χ^2 検定を行った。

Wilcoxonを用いて回答の安定性を見た。

5. 用語の操作的定義

1) 死生観

死生観とは、生きる意味と生の延長線上にある死についてどのようにとらえていくかという個人の考えをいう。ここでいう死生観とは、生と死に対する考え方であり、生き方や死に方についての考え方や価値とした。

6. 倫理的配慮

調査協力は自由意志であり、協力の有無や回答内容が学修に影響したり、成績に不利益を及ぼさないこと、得られた結果は本研究のみとし、他の目的では使用しないことを口頭にて説明し研究協力を求めた。

III. 結果

アンケートの回収率は、看護学生の回収率講義前100%(70名)、講義後99.6%(69名)であり、介護学生100%(58名)であった。また、同一質問に対しては、介護学生は31.0%、看護学生は講義前25.8%、講義後48.9%で異なる回答をしていた。Wilcoxonで検定した結果すべてにおいて有意に差があり、回答が安定していなかった。

1. 対象者の概要(表2)

対象の概要は表2に示した。

1) 年齢・性別

表2 対象の概要

項目	看護学生n=70	介護学生n=58
年齢		
10歳代	47(67.1)	49(84.5)
20歳代	16(22.9)	9(15.5)
30歳代	4(5.7)	0
40歳代	2(2.9)	0
50歳代	1(1.4)	0
性別		
女	56(80.0)	50(86.2)
男	14(20.0)	8(13.8)
身近な人の死		
あり	58(82.9)	42(72.4)
なし	12(17.1)	16(27.6)
続柄		
祖父	37(45.7)	31(47.0)
祖母	23(28.4)	14(21.2)
父	2(2.5)	1(1.5)
母	0	1(1.5)
きょうだい	0	1(1.5)
友人	10(12.3)	11(16.7)
その他	9(11.1)	7(10.6)

()内は%

看護は、10歳代 67.1%、20歳代 22.9%、30歳代 5.7%、40歳代 2.9%、50歳代 1.4%と年代が多岐にわたるが、10歳代・20歳代が90%近く占めていた。一方、介護は10歳代 84.5%、20歳代 15.5%であり、10歳代・20歳代で占めていた。

性別は、看護は男子生徒が2割を占め、介護は、1割強が男子学生であった。

2) 身近な人を亡くした経験の有無とその内訳

看護では、8割以上が身近な人をなくした経験を持っており、その内訳は、祖父が45.7%最も多くついで祖母 28.4%、友人 12.3%の順になっていた。父を亡くしたものが2名(2.5%)いた。一方、介護も祖父が47.0%と最も多く、ついで祖母 21.2%、友人 16.7%の順になっており、父、母、きょうだいを亡くしたものが各1名(1.5%)であった。

2. 講義前の死生観の項目別得点(表3)

死生観の項目別得点を表3に示した。

対象の死生観の得点は、「死の世界観」の看護学生の得点は平均点20.0点、SD5.3点、介護学生は平均点20.4点、SD5.1点、「死への恐怖・不安」の看護学生の得点は、平均点17.8点、SD6.4点、介護学生は平

表3 死生観の項目別得点

死生観の項目	看護学生		介護学生	
	平均値	S D	平均値	S D
第1因子:死後の世界観	20.0	5.3	20.4	5.1
第2因子:死への恐怖・不安	17.8	6.4	17.4	5.8
第3因子:解放としての死	11.6	5.5	12.3	6.4
第4因子:死からの回避	10.9	5.4	12.4	5.2
第5因子:人生における目的意識	16.6**	5.4	14.3	5.1
第6因子:死への関心	16.5	5.1	14.8	5.6
第7因子:寿命観	11.1	5.1	12.1	5.9

**p<0.05

均点17.4点、S D 5.8点、「解放としての死」の看護学生の得点は平均点11.6点、S D 5.5点、介護学生は平均点12.3点、S D 6.4点、均点17.4点、S D 5.8点、「解放としての死」の看護学生の得点は平均点11.6点、S D 5.5点、介護学生は平均点12.3点、S D 6.4点、「死からの回避」の看護学生の得点は、平均点10.9点、S D 5.4点、介護学生は平均点12.4点、S D 5.2点、「人生における目的意識」の看護学生の得点は、平均点16.6点、S D 5.4点、介護学生は平均点14.3点、S D 5.1点、「死への関心」の看護学生の得点は、平均点16.5点、S D 5.1点、介護学生は平均点14.8点、S D 5.6点、「寿命観」の看護学生の得点は、平均点11.1点、S D 5.1点、介護学生の得点は平均点12.1点、S D 5.9点であった。「死後の世界観」が他の項目に比べると看護学生も介護学生も特に高くなっており、死後の世界を信じ魂は残ると考えている学生が多かった。

第5因子項目「人生における目的意識」(t値2.40、p<0.05)では、看護学生のほうが有意差が見られた。また、有意差は出なかったが、第6因子項目「死への関心」(t値1.84)有意水準0.07となっていた。

第5因子(人生における目的意識)下位項目の『人生にはっきりとした使命と目的を見出している』と『人生の意義・目的・使命感を見出す能力が十分にある』と第6因子(死への関心)下位項目の『身近な人の死をよく考える』の3つの項目で看護学生のほうが有意に高くなっていた。

3. 介護学生の年齢および性別と死生観

10歳代の方が20歳代に比べ、『霊やたたりがある』『死後の世界はある』『死とはなんだろう』という傾向にあった。

女性のほうが、男性に比べ、『死んでも魂は残る』『死についての考えが浮かんでくるとはねのけようと

している』『霊やたたりはある』『人の生死は見えぬ力によって決められる』という傾向があった。

身近な人を亡くした経験がある人の方が『自分が死ぬことを考えると不安にはならない』『自分の人生について考えると、今こうして生きている理由がはっきりとしている』と生きている傾向があった。

4. 講義前後の看護学生の死生観(表4、表5)

講義前後では、7因子項目すべてで有意な差はなかった。

下位項目のうち、第2因子(死への恐怖・不安)の下位項目の『死を非常に恐れている』では、講義後が有意に低くなっていた。また、第3因子(解放としての死)の下位項目の『私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている』、第4因子(死からの

表4 看護学生の講義前後の死生観の項目別得点

死生観の項目	講義前		講義後	
	平均値	S D	平均値	S D
第1因子:死後の世界観	20.0	5.3	19.9	5.6
第2因子:死への恐怖・不安	17.8	6.4	16.5	6.4
第3因子:解放としての死	11.6	5.5	13.1	6.0
第4因子:死からの回避	10.9	5.4	12.1	5.9
第5因子:人生における目的意識	16.6	5.4	15.8	5.4
第6因子:死への関心	16.5	5.1	16.4	5.3
第7因子:寿命観	11.1	5.1	11.3	5.7

回避)の下位項目の『死は恐ろしいものであまり考えないようにしている』では、講義後に有意に高くなっていた。

5. 講義前後の看護学生の年齢および性別と死生観

1) 講義前

講義前では、7因子項目すべてで有意な差はなかった。

下位項目のうち、年齢で10歳代では、『世の中には霊やたたりがある』という傾向があった。また、未婚の人や子どもがいない人では『世の中には霊やたたりがある』という傾向や『死について考えることを避けていない』という傾向があった。

2) 講義後

年齢で10歳代では、『家族や友人と死について話さない』、『自分の死について考えることがよくある』、『死は痛みと苦しみからの解放である』という傾向があった。

表5 看護学生の講義前後の死生観下位項目別

上位項目	下位項目	中央値	
		講義前	講義後
死後の世界観 第1因子	死後の世界はあると思う	5.0	5.0
	世の中には「霊」や「あたり」があると思う	6.0	6.0
	死んでも魂は残ると思う	5.0	5.0
	人は死後、また生まれ変わると思う	4.0	4.0
死への恐怖・不安 第2因子	死ぬことが怖い	5.0	5.0
	自分が死ぬことを考えると、不安になる	5.0	5.0
	死は感ろしいものだと思う	5.0	4.0 *
解放としての死 第3因子	私は死を非常に恐れている	4.0	3.0
	私は、死とはこの世の苦しみから解放されることだと思っている	3.0	3.0
	私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている	2.0	4.0
	死は痛みと苦しみからの解放である	4.0	4.0
死からの回避 第4因子	死は魂の解放をもたらしてくれる	3.0	4.0 *
	私は死について考えることを避けている	2.0	2.0
	どんなことをしても死を考えることを避けたい	2.5	3.0
	私は死についての考えが思い浮かんでくると、いつもそれははねのけようとする	3.0	2.0
人生における目的意識 第5因子	死は恐ろしいのであまり考えないようにしている	3.0	4.0
	私は人生にはっきりとした使命と目的を見出している	4.0	4.0
	私は人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある	5.0	5.0
	私は人生について考えると、今ここに生きてい理由がはっきりとしている	4.0	4.0
死への関心 第6因子	未来は明るい	4.0	4.0
	「死とはなんだろう」とよく考える	5.0	5.0
	自分の死について考えることが良くある	5.0	4.0
	身近な人の死をよく考える	5.0	5.0
寿命観 第7因子	家族や友人と死についてよく話す	2.0	3.0
	人の寿命はあらかじめ「決められている」と思う	4.0	4.0
	寿命は最初から決まっていると思う	4.0	4.0
	人の生死は目に見えない力(運命・神など)によって決められている	4.0	4.0

*U検定有意差あり

女性は、『非常に死を恐れてはいない』と思う傾向と『家族や友人と死についてよく話さない』傾向があった。男性は、『身近な人の死をよく考える』傾向があった。

未婚の人は『死の世界はある』と思う傾向にあった。子どものいない人は『自分が死ぬことを考えると、不安になる』と思う傾向があった。

身近な人を亡くした経験のない人は、『死んでも魂は残る』と思う傾向にあった。身近な人を亡くした経験のある人は、『身近な人の死をよく考える』傾向にあった。

また、毎回の講義の感想やすべての講義終了の学生の感想には、「人に死と向き合わなければいけな

い場面が来るときがあるかもしれないので、死というもの避けるのではなく、自分なりに考え、多くの人支えていきたい。」患者自らが書いた詩や体験者の話では、「"がん"を持ちながらも一生懸命生きている姿に感動した。」など生きることについても書かれていた。

IV. 考察

回答の安定性を見るため、同じ質問を質問紙の前半と後半に置いて回答してもらったが、同一質問に対して、介護学生は31.0%、看護学生は講義前25.8%、講義後48.9%で異なる回答をしていた。Wilcoxonで検定した結果すべてにおいて有意に差があり、質問の回答において、前半と後半では同じ質問にも関わらず、異なる回答をしていたことになり、回答が安定していなかった。介護学生、看護学生の初回の調査は講義後の7月の調査に比べ異なる回答の割合が低かった。このことは入学直後の初回の講義でもあり緊張感のある中での回答で、学生は慎重に回答したためと考えられる。しかし、講義後の7月の調査では、大学の講義にも慣れ夏休みを後に控えク

ラス内も打ち解け、質問紙も同じものであったため、4月当初に比べ講義や友人、教員に対しての慣れが生じたことが影響していると考えられる。

死生観の得点においては、他の項目に比べ、「死後の世界観」の平均点が看護学生20.0点、介護学生20.4点と高かった。「死後の世界観」の下位項目は、死後の世界はある、霊やあたりがある、死んでも魂は残るなどの項目である。日本では核家族化や病院で最後のときを迎える人が多いなどから一般的に日常生活から隔離され、死はタブー視されている。そのため学生は死に直面する機会が少ないことが推測される。21年度版厚生労働白書¹²⁾によると20年度の世帯構成人数は2.63人であり、三世帯世帯は

8.8%と19年度より0.4ポイント増加しているものの19年度以前は減少傾向にあった。本研究の場合、同居家族の有無を質問していないため三世帯世帯の有無は不明であり、対象者の地域性、母集団も異なることから一概に比較することはできないが、白書から推測すると本研究の学生の世帯構成数も少ないと予測される。身近な人の死の経験は、看護学生が82.9%、介護学生が72.4%と7割以上の学生が身近な人の死は経験しているが、祖父母や友人であり、父や母、きょうだいの死とは異なっており、また上記の統計上の白書からも予測されるとおり、世帯が別である可能性が高く、同居しているか否かも影響を及ぼすと予測される。そのため、同居家族の有無についても質問紙に加え比較することも必要であったと考えられる。

また、看護学生の講義前の死生観の中でも年齢が低いほど看護学生は、「死後の世界観」の下位項目ではあるが『霊やあたりはある』と思う傾向であった。さらに介護学生の2年生より1年生⁵⁾、50歳代の看護師より30歳代または40歳代の看護師のほうが¹³⁾「死後の世界観」が有意に高い結果が得られているという先行研究から、若い人の方が死後の世界の存在を信じる傾向があると言える。

第5因子項目「人生における目的意識」、第6因子項目「死への関心」の2つの因子項目で、看護学生のほうが有意に高かった。また、第5因子(人生における目的意識)下位項目の『人生にはっきりとした使命と目的を見出している』と『人生の意義・目的・使命感を見出す能力が十分にある』と第6因子(死への関心)下位項目の『身近な人の死をよく考える』の3つの項目で看護学生のほうが有意に高くなっていた。本研究の調査年度の看護学生は年齢が10歳代から50歳代と多岐に渡っており、介護学生は10歳代20歳代のみであった。30代の学生の方が10代20代の学生より「人生における目的意識」は有意に高い¹¹⁾という先行研究の結果が得られていることから、年齢が影響していると考えられる。また、30歳代、40歳代、50歳代で一度社会に出て仕事を持った経験のある学生もおり、社会における荒波の中で挫折やさまざまな経験をしており、その経験を通して資格を取りたいという強い目的意識を持って入学してきている学生が多いことが考えられる。このことから、人生にしっかりと目的意識を持つこと看護師や介護福祉士になぜなろうと思ったのか動機を明らかにすること、それに向かって進んでいくことが大切である。未曾有の経済不況の中で資格取得のできる分野の教育は益々需要が高くなり、社会人入学生の増加が予測されるため、入学生の年齢構成も把握していくことが必要であると考えられる。

看護学生のほうが『身近な人の死をよく考える』の下位項目が有意に高かった。このことは、看護学生が身近な人の死を8割以上の学生が経験していたことや10歳代から50歳代までと年齢が多岐にわたっており、人の死と関ることが多いことも職業を選択する時点でわかっており、死への関心が高いことが考えられる。

岡本¹³⁾は、看護師の死生観尺度に影響を及ぼす要因として、「死への準備教育」を一つの因子とし、下位項目には『死について考えることは人を成長させる』『死を考えることは、生を見直す機会になる』『終末期にある身近な人の家族と接することは、生と死を考える機会になる』などのほか3項目をあげている。これらの項目は死への関心があって成り立つ項目であると考えられる。年齢が高い人ほど、経験年数が多い人ほど死の準備教育の必要性や意義を感じており看護師になってからの示唆もある。看護を目指す学生は、学生のうちから関心が高いのではないかと推測される。

介護学生の対象概要と死生観では、女性のほうが、男性に比べ、『死んでも魂は残る』『死についての考えが浮かんでくるとはねのけようとしている』『霊やあたりはある』『人の生死は見えない力によって決められる』と思う傾向があったが、『霊やあたりはある』という「死後の世界観」に対しては渡辺⁴⁾の調査では女性の方が「死後の世界観」で有意に信じているという結果が示されていた。男性の方が格闘技などのテレビやゲームの世界で殺されたり生き返ったりする体験を多くしていると考えられる。また、廣井¹⁴⁾は、長崎市内の小学生6年生への調査で33名中28名が人が死んだら生き返ると答えたとし、生き返ったら謝ればいと小学生が人の死を実感として受け止められていないとしている。すべての小学生に当てはまらないまでも、遊美感覚で死そのものをとらえていることが影響していると考えられる。

身近な人を亡くした経験を持つ介護学生では死への不安がない傾向がある。介護学生では死と向き合うことが多い高齢者の援助をする可能性が高いことは入学時点である程度予測している可能性があるため、死を受容的に受け止めようとする準備ができていると考えられる。このような心の準備が『自分の人生について考えると、今こうして生きている理由がはっきりとしている』と思う目的意識にも影響していると考えられる。

講義前後の看護学生の死生観では、7因子項目すべてで有意な差はなかった。下位項目のうち、第2因子(死への恐怖・不安)の下位項目の『死を非常に恐れている』では、講義後が有意に低くなっていた。小児がんの子どもの詩や命をテーマにした新聞記

事を読むこと、がん経験者や子どもを失った母親、また当事者等に取材した経験を持つ新聞記者の話は、死を身近なものとして具体的に死に対するその想いを伝えるため、講義を聞いた後は、死は怖くないものと変化していったのだと考えられる。しかし、一方で第3因子(解放としての死)の下位項目の『私は死をこの人生の重荷からの解放と思っている』、第4因子(死からの回避)の下位項目の『死は恐ろしいものであまり考えないようにしている』では、講義後に有意に高くなっていた。このことは、今まで他人事のように死をとらえていたことが具体的な生の話を聴くことにより身近になったがゆえに考えたくないと感じたと考えられる。また、身近な人の死を経験している人が看護学生では8割以上、介護学生も7割以上いたことから体験しているがゆえに少し距離をおきたいと感じられたと予測される。体験談などは一概に良いものだと思いつくことなく学生達の反応を見ながら行っていく必要性も示唆される。しかし、これから臨地実習に出て実際に終末期の患者さんに関する可能性も高い看護学生にとってはこれらの内容の講義は死への準備教育になると考えられる。

福山¹⁰⁾は物語を読むことによって、感情が読書前後で死へのイメージがネガティブなものからポジティブなものへと変化し、自己と他者の生を肯定してよりよく生きることを目指すことができるとしている。本研究の場合の講義では、内容の様々な取り上げ、時間数も少ないため、より明確に講義前後の感情の差は見られなかった。しかし、講義内容を絞ったり、学生間で話し合いをさせるなどすることによって感情への変化が出てくるとも考えられる。門林⁷⁾は闘病記を用いた授業の意義について患者の理解に役立ち、患者を大切にしたいよいケアをしたいといった思いを引き出すことができ、闘病記に描かれる患者の病に対する向き合い方を通して自らの生と死を考える機会になるとしている。筆者が行っている詩を読むことや絵本を読むこと、闘病記のように間接的ではないが当事者の話を聴くことは支持されたと考えられる。現在は、同じ教員が介護福祉学科の講義を受け持っていないため介護学生への効果を明らかにすることはできないが、福祉施設を終の棲家とし、残された余生をどう送るか、迫り来る死にどう向き合うかを考えながら、生と死を意識している高齢者をケアする介護学生にも効果が期待できる。

講義前後の対象概要と死生観では、講義後で、年齢の低い人は、『家族や友人と死について話さない』『自分の死について考えることがよくある』『死は痛みと苦しみからの解放である』という傾向があった。

具体的な話などに触れ講義の中で死については生について考えることになり、死や生の関心が自分の内面に向かっていったためと考えられる。本調査での傾向がすべての対象を反映しているとはいえないが、今回の結果から年齢、性別、結婚の有無等にも影響される傾向がわかった。看護学生は入学年代が多岐に渡ることが予測されるので、年度ごとの対象の特性も踏まえたうえで講義を組み立て内容を吟味していく必要がある。

本研究においては、同一教員が各学科を担当して講義していないことや講義の期間、内容も統一されていないこと、さらに介護学生には講義前後の比較をしていないことから、結果には限界があると考えられる。しかし、今後両学科とも講義内容を統一し、同一教員が講義をすることにより学生の特徴がさらに明らかになると考えられる。また、両学科の学生が同じ時間と場所で一緒に講義を受けることにより、より多くの学びが得られることもあると思われる。

V. 結論

1. 死生観には、年齢、性別が影響していた。
2. 看護学生も介護学生も『死後の世界観』の得点が高かった。
3. 身近な人の死は介護学生の死生観に影響していた。
4. 看護学生の講義後の死生観では、死への恐れが低下しており、解放としての死や死からの回避が高くなっていた。
5. いのちの教育や終末期教育において、詩や体験談や老いや死に関する絵本等を用いた教育は死生観に影響を与えおり、授業に当たっては対象の特性を把握して行う必要性が示唆された。

引用・参考文献

- 1) 石田順子、石田和子他(2007):看護学生の死生観に関する研究 桐生短期大学紀要18 109-115
- 2) 長谷川素子、安藤詳子他(2008):看護学生の死生観に冠する学年変化 死の臨床31(2) 282
- 3) 風岡たま代、伊藤ふみ子他(2007):看護教育による看護学生の死生観と共感性の変化に関する一考察 日本看護学教育学会誌 17(1)19-27
- 4) 渡辺きよみ、野村和子(2005):介護学生の死生観に影響を及ぼす要因の検討 大阪体育大学紀要 73-81
- 5) 渡辺きよみ、野村和子他(2006):介護学生1・2年生の死生観の比較検討 大阪体育大学紀要57-68
- 6) 花野典子、進藤洋子(1994):死に対するイメージとその関連要因 -看護学生と介護学生の比較- 提供平成短期大学紀要 4 9-13

- 7) 門林道子(2009): 闘病記を用いた授業 - 意義と今後の課題 緩和ケア 19 228-232 青海社
- 8) 門林道子(2009): 死の臨床研究会学会誌
- 9) 門林道子(2004): 闘病記に学ぶ生と死 ターミナルケア 14 207-210
- 10) 福山幸恵(2005): 看護学生を対象とした読書による「生と死の教育」の基礎的研究 - 「生」と「死」のイメージを中心として - 日本看護学教育学会誌 14(3)
- 11) 平井肇、柏木哲夫他(2000): 死生観に関する研究 - 死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証 - 死の臨床23(1) 71-76 日本死の臨床研究会
- 12) 21年度版厚生労働白書 制度の概要および基礎統計、世帯構成
http://www.mhlw.go.jp/za/0825/c05/siryoush09010100.html#1_1_0_3
<http://www.mhlw.go.jp/za/0825/c05/pdf/21010103.pdf>
- 13) 岡本双美子、石井京子(2005): 看護師の死生観尺度作成と尺度に影響を及ぼす要因分析 日本看護研究学会誌 28(4)
- 14) 廣井亮一(2006): ゲームやネットが子どもの死生観に与える影響 児童心理 60(10) 844-33-38
- 15) 河野友信、平山正美(2000): 臨床死生学辞典 日本評論社(東京) 18-19
- 16) 門林道子(2009): 生きる力に - 語りかける闘病記 - 死の臨床 32(2) 191
- 16) 小澤竹俊(2006): 13歳からの「いのちの授業」 大和出版 東京
- 17) 長田京子(2009): 死生観の育成に関する教育方法の現状と課題 - 1999年から2008年までの文献検討を通して 死の臨床 32(2) 319
- 18) 服部晃次、鈴木真由子(2009): 一人称の死を考える授業の現実性の検討 死の臨床 32(2) 319
- 19) 糸島洋子(2005): 死生観形成に関する調査-看護学生と大学生の比較- 京都市立看護短期大学紀要 30 141-147
- 20) 小櫃芳江(2004): 介護福祉教育における死の教育に関する一考察 - 養成課程における死の教育の現状と課題 - 聖徳大学研究紀要 短期大学部 37 9-16
- 21) 渡辺きよみ、野村和子他(2008): 介護学生とケアワーカーとの死生観の検討 大阪体育大学短期大学部研究紀要 9 113-124
- 22) 園田麻利子、上原充世(2007): ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要 11 21-35